



## 医療安全通信 第47号

## 【薬局部医療安全委員会】

医療安全推進のため、Pharma Bridgeを通じて、医療安全上の周知すべき情報やタイムリーな話題を随時発信いたします。業務手順書の書換えや日常業務にお役立てください。

## 「I'M SAFE」について

薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業の「共有すべき事例」2017年10月分には『注射剤の数量間違い』の事例が掲載されています。

[http://www.yakkyoku-hiyari.jcqh.or.jp/pdf/sharing\\_case\\_2017\\_10.pdf](http://www.yakkyoku-hiyari.jcqh.or.jp/pdf/sharing_case_2017_10.pdf)

## ◆ 事例の内容

トレシーバ注フレックスタッチを含む14種類の薬剤が記載された処方箋を受け付けた。トレシーバ注フレックスタッチ2本のところ1本のみ調製し、交付した。翌日の注射剤棚卸の際、在庫数が合わないことから間違いに気付き、注射剤調製時の写真撮影の記録により該当患者が判明した。

## ◆ 背景・要因

処方薬が多いことと、残薬調整に気を取られたことにより、計数間違いに気付かなかった。鑑査者は研修後の勤務で、体調不良もあり、通常とは異なる身体状況だった。

## ◆ 薬局が考えた改善策

調剤者は、調剤鑑査システムで照合する際、表示される薬剤の計数確認を行ってから鑑査へ回す。無理のないシフト調整を行い、体調不良の職員に配慮する。注射剤の棚卸と注射剤調製時の写真撮影（独自の取り組み）は、引続き毎日行っていく。

## ◆ 事例のポイント

○航空業界には、I'M SAFEという言葉がある。ヒューマンエラーが多発する心身状態を示したもので、順に、illness 病気、medication 服薬、stress ストレス、alcohol 二日酔い含む、fatigue 疲労、eating 空腹・満腹を表わしている。こうした状況にある時は、エラーを起こさないように自覚する必要がある。そもそも、そうした状況で業務にあたらぬよう自己管理するとともに、シフト作成における管理側の配慮も求められる。

○今回の事例では、「注射剤調製時の写真撮影」が誤調剤の検証に大いに役立っている。

○誤調剤を起こさないことはもちろん重要だが、ミスを100%無くすことは難しいため、誤調剤を早期に発見し、患者を特定するための事後対応の仕組みの構築が重要である。調剤の写真撮影やビデオ撮影など、手間のかからない仕組みが望ましく、この薬局の取り組みは参考になる。

【原文のまま抜粋】

航空業界での安全管理の考え方が、医療安全に取り入れられていることは多く、パイロットが自分の体調を把握する「I'M SAFE

チェックリスト」もその一つです。

医療従事者は、これらの状態がいつも良好であるように自己管理が求められますが、万全な状態でなくても業務を続けなければならない場合もあります。そのような時は、注意力、判断力が低下している恐れがあることを意識して、いつもより慎重に行動することが必要です。

また、本人が体調不良を自覚していない場合もあり、一人ひとりが自己チェックを行うと同時に、他のスタッフの行動も気にかけて、お互いの状態が問題ないかを確認し合うことも重要です。

## I'M SAFE チェックリスト

## I : Illness (病気)

✓ 病気の症状や体調不良はないか？

## M : Medication (薬)

✓ 薬（特に眠気を催す薬）を飲んだか？

## S : Stress (ストレス)

✓ ストレスを感じていないか？

## A : Alcohol (酒)

✓ 飲酒したか？二日酔いはないか？

## F : Fatigue (疲労)

✓ 疲れを感じていないか？

✓ 休息は十分とれているか？

## E : Eating and Elimination (食事と排泄)

✓ 食事をきちんととっているか？

✓ 空腹ではないか？又は食べ過ぎていないか？

✓ トイレを我慢していないか？排便、排尿は順調か？